

第11章・大学におけるグループピアノ指導について

E・グレゴリー・ナゴーデ

ここ30年の間に、多くの大学において音楽専攻生に対する鍵盤楽器演奏技能の向上を目指す要求が高まり、そのにつれて、グループ形態によるピアノ指導を採用する大学が年々増加してきました。この大学レベルにおけるグループ指導は、大多数の場合、次に示す3つのタイプのいずれかにあてはまります。

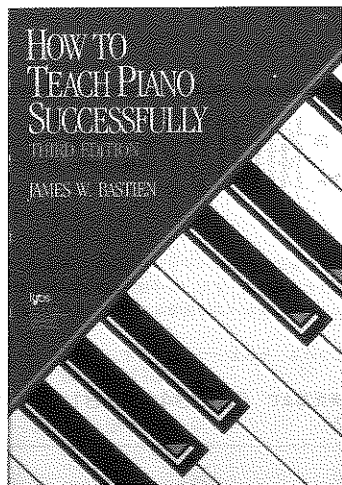
- ① 鍵盤楽器専攻以外の音楽学生が鍵盤楽器を履修する場合
- ② 音楽専攻でない学生が初めて鍵盤楽器を履修する場合
- ③ 鍵盤楽器専攻生が履修する場合

グループ形態によるピアノ指導を個人レッスンの場合と比較すると、鍵盤楽器による音楽的技能を発達させるということに関して、グループ指導は、より実用的で効率的な方法であると考えられます。

大学レベルにおけるグループピアノ指導は、決して新しい方法分野ではありません。クラスピアノの方法論は、実際この分野の開拓者であるレイモンド・バローズによって今世紀の前半に開発されたものです。彼はコロンビア大学教育学部の専任教官として、グループ形態による

ピアノ指導、及びグループピアノ教育法の授業を担当しながら、グループピアノ教育についての幅広い著作を残しています。その中で彼は、グループピアノ指導とは実用的な技能を発達させるための理想的な方法形態であると述べています。現代におけるグループピアノ指導の技術は非常に洗練されたものとなっていますが、これにはロバート・ペース、ジェームズ・ライク、ローレンス・ラスト等の優れた功績による影響が見逃せません。

大学におけるグループピアノ指導の中で中心的な目標となるものは、基本的な演奏能力と実用的な鍵盤技能です。またそこでの学習内容は、理論的諸概念、音階と和音、初見視奏、移調、スコアリーディング、和声付け、即興、の各領域と関連したものが扱われます。そしてこれにレパートリー学習、テクニック学習をつけ加えるならば、このレベルの学習としてはよりピアノスティックな能力を高めることが出来るでしょう。またこの「グループピアノ」は、音楽学部のカリキュラムの中でも中心的な授業科目として考えられており、「音楽理論」と並んで1,2年生の必修科目となっています。多くの場合、「グループピアノ」の授業内容は、「音楽理論」の授業内容と相互に関連性を持たせて、学生の音楽的、感性的、理論的理解力を発揮させるように計画されています。



J.W. バスティン 編者

効果的なピアノ How to Teach

1

コース概要

大学における「グループピアノ」の授業内容は、対象とする学生の種類、ピアノ演奏技能等に合わせて、それぞれの内容が設定されています。技能面での要求度は、受講する学生の専攻分野によって、当然異なります。「グループピアノ」コースのごく一般的なカリキュラムは、鍵盤楽器専攻以外の学生を対象とする場合、4学期間にわたって徐々にレベルが上がるような内容設定となっています。授業の時間は約50分、週に2～3回行なわれるのが普通です。

1クラスの人数は、教室の大きさ、使用出来るピアノの台数、予算、学生のレベル、講師の方針、等によって決定されます。受講希望者が多数の場合でも、1年目のクラスは10～13名、2年目のクラスは6～10名程度に学生数を限定するのが普通です。というのは、指導するクラスの人数が、教育効果に直接関わってくるからです。

ピアノ専攻以外の学生の場合、全くピアノ学習経験のない者もいれば、少し学習を経験している者もいます。また中には、かなりの演奏能力を持つ者もいます。このような学生の能力差に対応するためには、授業登録に先立って能力診断テストを実施し、学生をいくつかのクラスに振り分けます。この能力診断テストは、その学校で実際に開講しているいくつかのコースそれぞれのレベル程

度に合わせて実施されますが、学生はここで測られたピアノ演奏能力によって、グループピアノの適切なレベルのクラスへ割り振られるのです。

また多くの大学では、音楽教育、ピアノ教育、ピアノ演奏、を専攻する学生に対し、上級者用のグループピアノコースも設けています。このような学生の演奏技能は、大学入学時までに行なってきた学習によって一見かなりの程度に達しているように見えますが、実際こうした学生の持つ演奏技能は、やや片寄ったものであることが多いのです。従って、このような学生を対象として、2期にわたるグループピアノコースを設けています。

2

指導者とその養成

グループピアノの指導者は、ソロの演奏能力やアンサンブルのテクニックばかりでなく、実用的な技能をも兼ね備えた優秀な音楽家でなければなりません。またさらに、組織力があり、概念学習を行なう実践力も持ち合わせている必要があります。こうした資質・能力は、概念が順序良く学習されるように計画されたカリキュラムに従って音楽の諸要素を明確に説明したり、ピアノ技能を指導したりする際に必要な能力手腕として、大切なことなのです。

質の高いグループピアノ教育に対する関心とその必要性が高まるにつれ、いくつかの大学では、既に、特にグループピアノに限定した指導者養成コースを開設してい

指導法 (第3版の要約) 11 ●丸山太郎 訳

Piano Successfully

ます。このようなコースで設定されている履修内容は、およそ次のようなものです。

1. 「包括的音楽家性」の考え方を検討すること。
2. 学習理論の発達、及び心理学をグループピアノ学習に応用することについて研究を行なうこと。
3. オールドビギナー、成人の初心者、それぞれの場合について、学習に必要な様々な要素を検討すること。
4. 教材の調査、又は比較研究を行なうこと。
5. 電子ピアノを備えた教室、又はその他の教育設備を使って、模擬的な教育実習を行なうこと。
6. 学習指導計画、効果的な授業方法を実際に考案すること。

また以上と同程度に大切な事柄として、グループダイナミクス、及びグループという状況における学習理論についての研究が挙げられます。この分野に関する知識を会得することによって、グループピアノの指導者を目指す学生は、グループという学習状況の中において、生徒間の効果的な相互作用を促進させるような教育技術を身につけていくことが出来るのです。またグループピアノの指導者は、生徒に知識を伝えたり、その進歩状況を監督したりすることに加えて、生徒の理解力を発達させる方法の一つである「発見学習」についても精通していなければなりません。これは、生徒の発言を聞いたり、生徒に発問したりすることに関する高度なコミュニケーション技術が関連していますが、この種の技術は、生徒の学習意欲を引き出したり創造性を刺激するための大変重要なテクニックであると言えます。

たいていの大学では、グループ指導の担当を、専門の専任教官に加えて、大学院生を助手として充てています。大学院にピアノ教育のコースを設置している大学では、こうしたグループピアノの助手担当者育成のために、ユニークなインターン制度を導入しています。実習助手と呼ばれているこの制度は、実際の授業が教育実習を兼ねること、つまり、実習に二重の機能を持たせた制度です。

3

設備・備品

グループピアノの授業を行なう教室には、たいていの場合、数多くのピアノといく種類もの視聴覚機器が備え付けられています。ピアノの種類としては、これまで従来のアコースティックピアノが主でしたが、1950年代半

ばから1960年代にかけて電子ピアノラボ（電子ピアノを数多く備え付けた教室）が使用されるようになり、それ以後グループピアノによるピアノ教育は大きく拡大したのです。これは大学におけるグループピアノの指導に関して、電子ピアノが大変好都合であるため、電子ピアノラボが広く普及したことが影響しています。

電子ピアノラボは、本来教育方法の拡大を狙って設計されたもので、クラス内のコミュニケーションパターンを増やしたり、授業内で一斉に行なう学習活動の種類を豊富にすることを目的としています。例えば、ヘッドフォンが付属した生徒用ピアノを、コントロールデスクから指導者が操作することによって、多様な学習活動が展開できます。しかしピアノ教室の多くは、独奏用作品の演奏その他のために、少なくとも1台アコースティックピアノを備えているのが普通です。

グループピアノ指導は、様々な教育機器や備品等の活用によっても効果を上げることが出来ます。従来から使われている黒板の使用に加えて、オーバーヘッドプロジェクターやヴリッツァー・キーノート・ヴィジュアルライザーは既に良く知られた視覚教具です。

その他の視覚教材としては、ビデオテープやスライドが挙げられます。スライドプロジェクターは、スライドを提示するスピードをコントロールすることが出来るため、特に初見のドリルに使うと効果的です。

オーディオ関係で最もポピュラーなものは、ピッチコントロール付きのカセットテープデッキでしょう。これには、電子ピアノに接続できるようになっている機種もあります。カセットテープは、生徒用のピアノ1台1台に付けられている場合もあれば、教師用コントロールデスクと接続してあり、チャンネルを通して1人づつないしは複数の生徒が利用できるようになっている場合もあります。グループピアノ用のテキストの中には、カセットテープが付属し、それにより教育効果の向上を狙ったものもあります。このようなテープは、たいてい、個人及びクラス全体のどちらでも使用出来るようになっています。それには様々な演奏例が含まれていますが、その一例としては次に示すようなものが挙げられます。

1. 和音や音階練習のための伴奏
2. メロディー即興のための伴奏ないしは和声進行
3. ピアノで伴奏を練習するためのメロディー（他の楽器や声によるもの）
4. デュエットの片方のパート
5. 和声付けするためのメロディー

以上述べてきたような視聴覚機器による指導法は、或る特定の概念について、生徒の認識力を高めたり拡大したりする目的に有効です。このための教材を準備することは実際非常に時間のかかることですが、より変化に富み、効果的で意義深い授業を行なうためには、この様な視聴覚教材の使用が大変有効な手段となります。

4

教育内容

総合的観点からバランスの取れたカリキュラムを作成するためには、まず第1に、各学期毎に教育目標を定め、それぞれに応じた学習内容を割り振らなければなりません。そして次に、それぞれの枠内において、学習項目の一つ一つを適切な順序で配列していきます。以上のことが予めきちんとカリキュラム化されているならば、実際の授業に際して大変都合であるばかりでなく、初心者や編入生にレベル適性試験を行なう場合にもこれを活用することができます。また大学院生が教育実習生としてグループピアノの助手にあたる場合も多いのですが、この場合も良く整ったカリキュラムが前もって準備してあれば、カリキュラムの統一と授業の一貫性を守ることが出来ましょう。

グループピアノを担当する指導者の中には、音楽教育又は音楽理論担当教官との相談に基づいて学習目標を設定する人もいます。この様な方法は、音楽教育専攻の学生にピアノを教える場合特に大切なことです。というのは、音楽教育専攻生の身につける教育技術は、自分が受講したグループピアノの授業で得た音楽技能と直接結びつくからです。そして、このようにして得た知識や教育技術は、自専攻（音楽教育）で行なわれる模擬授業や総合的試験の際に生かされることになるばかりでなく、将来自ら教育内容を計画するにあたって、大変役立つものとなるのです。グループピアノに含まれる学習内容のうち、音楽の理論的領域については、理論学習のコースと重複する部分も多くあります。従って、特にグループピアノと音楽理論の両コースが共に必修科目である場合には、グループピアノの担当者は理論担当教官と打ち合わせをすることが望ましいと言えます。

グループピアノのカリキュラムは年と共に進歩し、徐々に内容の統一をみるようになってきました。もちろん学校によってその強調点に相違はありますが、次に示す各領域は、その内容の典型的なものと言えます。

1. レパートリー（ソロおよびアンサンブル）
2. 理論（音階や和音について）
3. テクニック
4. 読譜技術及び移調
5. 和声付け
6. 即興

5

レッスン計画

従来、音楽における理論学習は、他の領域と切り離され、それだけ個別の分野として学習されてきました。しかしグループによるピアノ学習では、このような理論学習を、音楽的経験の中で効果的に学習することが出来ます。つまりここでは、新しい概念を、単純でしかも音楽的満足が得られるような曲を通して学習するのです。ここで用いられるこのような目的を持つ作品・教材は、一般に「概念学習教材」と呼ばれています。そして学習内容の定着やテクニック強化のためには、さらに別の曲を学習します。大学生の場合は、概して、学習する教材がテクニク的にはそれほど難しくなくても、音楽作品として洗練された響きを持っているならば、それで十分満足できるものです。

読譜の技能は、音程を識別する方法で開始することも出来ますし、〈長期導入型全調メソッド〉の方法論に則ってもうまくいくでしょう。現代のピアノ作品の中には、音階や和音パターンに基づいた曲が数多く作曲されていますが、これらの使用は、パターン認識力を発達させたり読譜力を高めるのに効果的と言えます。またピアノ専攻以外の学習者にとっては、ピアノ曲によく用いられる音型や指使いが含まれた教材を最初の段階から使うことによって、効率の良い学習を行なうことが出来ます。

テクニック学習の内容とは、一般的に、音階や和音パターンの練習ということになりますが、グループピアノ担当の指導者が忘れてはならないことは、生徒にテクニック学習をさせる際、音そのものの質、音に対する感じ方、教師自身のジェスチャーについても注意して指導しなければならないということです。

和声付けと即興技術の育成も、大切な学習項目として見落とすことが出来ません。和声付けは、有名なフォークソング、名曲のテーマ、現代的なメロディー、などを素材に、様々な伴奏スタイルでこれが出来るよう学習します。一方即興学習は、新しく学習した理論を応用する創造的な活動として、その能力を発達させていくことが

出来ます。また、その時流行しているポピュラーソングや流行歌を聞き取って、それを演奏するというのも良い学習になるでしょう。

以上のような学習内容を含んだ効果的な学習計画とは、3つの重要なファクターによって決定されます。その第1は、変化に富んでバランスのとれた教育法、第2は、新しい学習項目に対する学生のレディネス状態、第3は、学習内容の適切な配列です。これにさらにつけ加えるならば、有効な学習活動を相互に関連させて授業プランをまとめあげる教師自身の能力・手腕ということになります。

グループピアノの教師が実際の教育内容を決定する場合、非常に幅の広い内容領域から選択しなければなりません。従って、各領域から選んだ学習内容を、学期はじめリストアップしておくとい良いでしょう。そしてこのリストに従って、具体的な学習活動や学習項目の一つ一つを細分化していけば良いのです。

6

テキスト

グループピアノ指導用のテキストは非常に数多く出版されており、補助的なテキストの種類も豊富です。ここでどのようなテキストを用いるかについては、様々な要因がこれに関わってきますが、例えば、そのコースの目的と修業年限、生徒のそれまでの学習経験と現在の技術レベル、指導者の考え方、などが考慮すべき要素として挙げられましょう。

それでは次に、大学1～2年生用のクラスに適したグループピアノのテキストを掲げておきます。

★大学生用グループピアノのテキスト

- ① Heerema, Elmer / *Progressive Class Piano*. 2nd ed.
- ② Hilley, Martha & Lynn Freeman Olson / *Piano for the Developing Musician*,
- ③ Lyke, James, Ron Elliston & Tony Caramia / *Keyboard Musicianship, Books One & Two*. 4th ed.
- ④ Mach, Elyse / *Contemporary Class Piano*. 3rd ed.
- ⑤ Page, Cleveland / *The Laboratory Piano Course, Books 1 & 2*.
- ⑥ Stecher, Melvin, Norman Horowitz, Claire Gordon,

R. Fred Kern & E. L. Lancaster /
Keyboard Strategies, Master Texts I & II.

★併用教材

《初見》

- ① Bastien, James / *Sight Reading, Levels 1-4*.
- ② George, Jon / *Patterns for Piano*.
- ④ Havill, Lorina / *You Can Sight Read, Books 1 & 2*.
- ⑤ Lang, C. S. / *Score Reading Exercises*.
- ⑥ Melcher, Robert A. & Willard Warch / *Music for Score Reading*.
- ⑦ Wilkinson, Philip G. / *100 Score-Reading Exercises*.

《和声付け》

- ① Caramia, Tony / *A Guide for Jazz Piano Harmonization*.
- ② Frackenhohl, Arthur / *Harmonization at the Piano*. 5th ed.
- ③ Kern, Alice / *Harmonization-Transposition at the Keyboard*.
- ④ Mainous, Frank D. / *Melodies to Harmonize With*.

《アンサンブル》

- ① Lyke, James / *Ensemble Music for Group Piano, Books 1 & 2*. 3rd ed.
- ② Ogilvy, Susan / *Ogilvy Piano Multiples, Blue-ettes; Ogilvy Piano Multiples, Book 1; Ogilvy Piano Multiples, Jazz Vignettes; Pops for Piano Ensemble*.
- ③ Page, Cleveland / *Ensemble Music for Group Piano*.
- ④ Sabol, Mary / *Rock & Rhythm Studies for Class Piano*.
- ⑤ Vandal, Robert D. / *The Vandal Piano Ensembles*.

《即興》

- ① Lloyd, Ruth & Norman / *Creative Keyboard Musicianship*.
- ② Mack, Glenn / *Adventures in Improvisation at the Keyboard*.